



TITLE:

(随想)尿石症体験記

AUTHOR(S):

稲田, 務

CITATION:

稲田, 務. (随想)尿石症体験記. 泌尿器科紀要 1960, 6(1): 1-2

ISSUE DATE:

1960-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111894>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 6 巻 第 1 号

昭和 35 年 1 月

随 想

尿 石 症 体 験 記

京都大学教授 稲 田 務

新潟に於ける東部地方会の後、9月28日、新潟より東京への車中に於て右腰部に鈍痛を感じた。特二の座席をいろいろにかけんしても治まらず、腸の痛みや神経痛のようでもない。同夜の東京から京都への寝台車にてかなりの痛みがあり、持参のノブロン錠内服にてうとうとと睡つた。帰宅後も同じ痛みあり、10月2日に尿石を疑つて検尿した。尿は清澄であるが蛋白、赤、白血球陽性、X線単純撮影にて右尿管の上部と思われる辺りに帽針頭大のややかどのある石の影像が認められた。これで石のある事が確定し、私は一種異常の気持がしたし、教室の中にも複雑なセンセーションが起つたようだ。

思うに20数年前、私が医者になりたての頃、テニスをしていた時に急に右腹部の疝痛と血尿を来し、X線にて右尿管に小石が認められた。それは知らぬ間に自然排出したが、私には石の出来る性質がないではない、それに今年の夏はひどい暑さで、尿は濃いのが少量出るばかり、全く氣息えんえんの状態であり、更に病用、雑用が続々とつめかけて暑休どころではなかつた。8月29日の日記には、身体がだるく、血尿のようだと言っており、その夜中にも血尿の如しとある。つまりこの頃には既に石が発生していたらしい。その原因の一つとして暑気のための乏濃尿が考えられ、また私はふだんから自律神経亢進の体質であるから、心身の過労も関係があると思われる。こんな事ならもつと多く水を飲めばよかつたと後悔する。然し石の発見が早かつたのはせめてもの幸せであつた。汽車の中で痛み出したのであり、その意味では新潟行きはよかつたわけだ。

いづれにしても治療にかからねばならぬ。石の大きさから考えて自然排出の可能性はあるので、早速ブスコパン、サークレチン、ベンチル、アトラキシン、ノブロン等を雑然と始めた。どれか一種では心細く、各種併用となつた。これではたとえ石が下降してもどの薬が効いたのか判らぬ事になり、製薬会社には相すまぬが致し方ない。水分やビールも気張つて飲む。その他に、石のある右腰部の辺りを叩けば石を動かすのに効果がありそうに思われたので、とんとんと軽く叩く。また体操や縄とびのような跳躍運動も行う。これは新案であろう。10月5日に静脈性腎盂撮影を行つた。石は前回と同じ所にあり、右腎の排泄機能は遅延し、腎杯、腎盂は拡張し、更に不完全重複腎盂が発見せられ、2本の尿管が1本に合流している部位に石が介在している。この形態異常のある事も石の発生に関係がありそうだ。昔に石が出来たのも右側であつた。ロワチン内服を始めた。10月19日のX線写真にて石が移動していないので少し不安が増した。23日から数日間鳥取方面に出張したが特に異変はなかつた。28日久しぶりに腰痛があり、前記各種の薬を用いた。31日と11月1日は和歌山の中部地方会に出席したが特に異常はなかつた。4日の尿は軽く濁り、血性小浮游物があり、右下腹に不快感がある。その部を深く圧迫すると鈍痛がある。5日には初めて排尿終末時に膀胱部不快感が起つた。その夜の汽車にて日泌理事会出席のため東

京行き 6日にも、また7日帰宅後にも同様の症状があつた。それで石は膀胱壁内にあるのではないと思つた。8日にも膀胱部に持続性鈍痛あり、9日の尿はやや血性で、軽度の悪寒があつた。抗生剤も服んだ。12日に第2回目のI V Pを行つたところ、石はかなり下降しており、膀胱壁から2~3 cm 上方と思われ、増大もしていなかつた。これでやや安堵した。この時の写真で、重複尿管が1本になつた部の下方が細くなり曲つている事が判り、この部位に石が留つていたのである。17~18日は尿がかなり濁つていた。19日から数日間膀胱部に持続性の刺戟感、残尿感あり、排尿後に特に著しかつた。23日から会陰部に持続性に刺戟感と尿意が起つて来た。これは石が膀胱壁内にあつて、尿管の刺戟が後部尿道まで伝わるためではないかと思つた。それで25日にX線撮影を行うと、石は前回より更に2~3 cm 下降し、膀胱壁内に入る所か或は壁内に在ると思われる。30日の就寝時にベンチル、ブスコパン等を服んだが、夜半に膀胱部にかなり強い痛みあり、ノブロンを飲んでまどろんだ。朝の尿はやや濁っており、排尿終末から後にかけて膀胱部に軽い痛みがあつた。この時に尿管から膀胱内へ石が出たかも知れぬと思つた。その後特に異常なく、12月5日の関西西地方会も無事勤めた。7日は尿やや濁、小浮游物あり、膀胱部に絶えず尿意あり、排尿後に膀胱の収縮するような感があつた。10日に至り会陰部の奥に刺戟感あり、排尿開始時に著しい異常感あり、終末時には却つて軽度である。尿線がやや細い。会陰部を圧すると過敏である。どうやら石は後部尿道に出ているらしい。尿は清澄。12日のX線写真にて石は明かに後部尿道にある。これでとに角、手術はせずにすむようだ。石の排出も遠くない。私も教室員も活気が出て冗談もとび出す。教室員の間では「今夜の宿直は誰だ。尿閉のとびこみ（緊急入院患者の事）があるかも知れんぞ」「先生、茶泊しを持って歩かれたらどうですか」「石が出たら教室の宝にしよう」等と賑やかだ。私も石が出る時には尿を手で受けても石を掴みたいものと心の用意をした。その夜は教室の忘年会でビール等を相当のんだ。いよいよ12月13日、この朝の尿は清澄であつたが、昨日と同じく排尿開始時に会陰部に灼熱感あり、尿線やや細く、排尿終末時には軽度の異常感がある。二日酔の気分であつたが、用件のために大阪近くの寺へ出かけた。2時間程座つていた後、排尿に立つた。古寺の木造便所である。私のうしろには友人が順番を待っている。普通の立位にて排尿していると、突然に前部尿道辺りに、何かつまつたような異常感が出た。然しそれはほんの瞬間の事で、すぐそのあと排尿が続いた。終末時は何の異常感もない。今のは一寸変であつたぞ、はつきり石が出たようでもなかつたが、或は出たのかも知れぬ。手で受けてみる間もなかつた。うしろに人も居た。次の排尿時の様子に気をつけてみようと思つた。2時間後に帰宅して排尿すると、開始時にも終末時にも全く異常がない。尿線も細くない。これで殆ど間違なく石は出たのだと思つた。翌朝は早く目が覚め、嬉しくて睡れない。本当に晴れやかな気持ちだ。家人にもその由を告げ、勇んで出勤し、教室の人達にそれを話すと、皆大へんに喜んでくれた。念のためX線撮影すると石は全くない。竜頭蛇尾で、少し拍子抜けの感を与えたかも知れぬが、やれやれ助かつたと思つた。9月下旬から2ヵ月半、教室員に心配をかけた。G助教授には、手術する事になつたら困ると気をもませた。薬の世話にもなつた。疝痛という程のものもなく、日常の業務を休む事もなく、石は無事に排出されたのであるから、どの薬も全て奏効したものと思う。石が出た時の条件を考えてみると、二日酔の気分であつたが、これが尿道の弛緩状態をもたらすのに一役を演じたかも知れぬ。もしそうならば尿石の排出には宿酔状態が有効という事になる。但しこれは受け合へぬ。ただ残念なのは石を採り損じた事であるが、然し落した場所が寺という清浄地である。寺にはお骨でも納めるのであるから、あの石も寺へ納めたと思えば満足である。時々はお詣りして、あの古ぼけた便所へも行つてみたい位だ。いずれにしてもこれからは油断せずに、水分を充分に飲むようにせねばならぬが、この点は諸家におかれても心掛けて貰いたいと思う。